

## 応用精神分析と反哲学

### ——医学，哲学と精神分析——

立木 康介

「精神医学と哲学」というテーマは、この二つの学問領域と精神分析の関係をあらためて問い直すよい機会かもしれない。

いや、問い直されるべきは、因縁浅からぬこの隣人たちとの関係をとおして、精神分析が自らをいかに定義するかでなくてはならないはずだ。

精神分析と精神医学の関係、および、精神分析と哲学の關係に、ジャック・ラカンがそれぞれ正確な名を与えた。「応用精神分析 *psychanalyse appliquée*」と「反哲学 *antiphilosophie*」である。これらの呼び名のうちに、精神分析の自己規定が伴意されていることは言を俟たない。私たちはその自己規定にこそ迫らなくてはならない。

精神分析史のなかで、「精神分析とは何か」を問い直す作業をラカンほど徹底して行った分析家はいない。それがラカンの意志であったことは疑いを容れないが、同時に、他のあらゆる社会的実践の領域においてと同様、精神分析の世界においても頻繁に生じうる政治的ドラマのいくつかに巻き込まれ、そのつど苦杯をなめさせられてきたラカンが、自らの措かれた状況によって余儀なくされたことでもあった。「応用精神分析」および「反哲学」は、そのラカンによって提示された観点だからこそ、「精神分析とは何であるか」を知る上でたしかな価値をもちうる。これらの観点は私たちに何を教えるのだろうか。与えられた時間のなかで考えてみよう。

### I フロイトのほう

しかし、そのためにはまず、「精神分析の父」たるジークムント・フロイトが医学および哲学といかなる関係をもっていたのかを、ふりかえっておく必要

がある。それはたんに、一九六四年に自らが設立した独自の精神分析組織に「パリ・フロイト派」と名づけたように、ラカンがつねにフロイトの最も正統な後継者であることを望んだからというより、むしろ、フロイトが医学や哲学とのあいだに結んだ関係のいくつか、ラカンのもとで、あるいは、ラカンを取り囲む状況のなかで、ある種の帰結をもたざるをえなかったからだ。

ただし、いま私は「精神医学」ではなく、たんに「医学」と述べた。というのも、じつに単純に、フロイトは「精神科医」ではなかったからだ。フロイトが一九二〇年によく獲得した制度的肩書きは「ウィーン大学神経学教授」であり、彼の長年のライバルだったユーリウス・ヴァーグナー＝ヤウレクの「精神医学教授」とは異なる。実際、脳組織学から出発し、神経解剖学を経て、まず内科医として一八八二年に開業したフロイトは、時のウィーン大学精神科教授テオドル・マイネルトのもとで精神科二等医師として働いた五か月ほどの期間（一八八三年五月～九月）を除いて、精神医学を自らの「専門」とすることはなかった（反対に、このマイネルトの後任になるのがヴァーグナー＝ヤウレクだ）。これは、もともと精神科医としてキャリアをスタートさせたラカンの場合と大きく異なる点だ。

このことは、当時は医師のあいだをたらい回しにされることが多かった神経疾患の治療に、彼自身が告白しているように「経済的理由から」目をつけ、その治療法として「精神分析」を確立するに至ったフロイトが、この新技法の適用をもっぱら「転移神経症」の患者に限定し、いわゆる「狂気」、すなわち精神病（フロイト自身のタームに従えば「ナルシシズム神経症」）の領域にそれを拡大することにはっきりと消極的だったことと関係している。フロイトはおそらく、しばしば言われるように、「狂人」に関心がなかったわけではなく（その証拠に、ユングやアーブラハムといった弟子たちが精神病の精神分析的治療を試みることを歓迎し、励まただけでなく、やがてヴァーグナー＝ヤウレクの医局で活躍し始める自らの弟子たち、すなわちハインツ・ハルトマンやヘレーネ・ドイチュらに大いに期待をかけてもいた）、むしろ、やはり単純に、精神病患者と接する経験に乏しかったのだ。

もっとも、精神科医でなかったとはいえ、フロイトが医師であったことに変わりはない。このことは、精神分析がその出自を医学のうちにもつという歴史

的事実を意味する。それゆえ、フロイトにおいては、精神医学というより、むしろ医学と精神分析の関係を見わたすことが重要だ。精神分析のこの医学的出自にもかかわらず、フロイトは精神分析を医師の専売特許にすることを望まず、とりわけ一九二〇年代からはそれに明確に異を唱えるようになる。一九二五年、自らが教育分析を行ったテオドル・ライクが医師免許をもたずに精神分析を施療した廉で訴えられ、ウィーン当局から業務停止を申し渡されると、フロイトは素早くそれに反応し、精神分析家の育成がけっして医学教育には還元されぬことを訴える『素人分析家の問題』(一九二六)を出版して、ライクを強力に弁護した。翌二七年にライクの処分は解除されるが、同じ年にフロイト自らがこの著作について『国際精神分析雑誌』に寄せた「後記」には、次のような注目すべき一文がある——「私は精神分析の固有の価値と、その医学的応用からの独立とを支持する」<sup>1</sup>。さらにこうも書かれている——「実際には、学としての精神分析と、その医学的・非医学的応用とのあいだに、分割線が走っているのである」<sup>2</sup>。ここには、たんに精神分析を医学から独立させるだけでなく、両者の関係を逆転させる視点がすでに含まれている。フロイトにとって、精神分析の技法を医師が用いることは、すでに精神分析の「(医学的)応用[Anwendung]」だったのだ。この発想は、およそ四〇年の時を経て、ラカンによって明確に引き継がれるだろう。

しかし、フロイトのこうした考えは、それ以外の点でならフロイトの教義に忠実であるはずの国際精神分析協会 (International Psychoanalytical Association = IPA) には、ほとんど浸透しなかった。シャルラタン (偽分析家) の横行に折から悩まされていた英語圏、とりわけ米国の分析家たちは、むしろフロイトの意に反して、非医師分析家の徹底した排除を進めていった。一九三〇年代から八〇年代まで、米国では、ごく僅かな例外を除いて、事実上、医師でなければ分析家になれなかった。晩年のフロイトが、海の向こうのこうした趨勢に業を煮やしたことは想像に難くない。だが、米国精神分析のこの選択が正しかったのかどうかは、その後の歴史を俯瞰すれば明らかだ。精神医学のなかに囲い込まれた結果、一時は精神医学を「力動論」化することに成功した米国精神分析だったが、早くも六〇年代の後半になると、行動主義心理学とニューロサイエンスに注目しはじめた精神科医たちから背を向けられ、みるみる衰退していっ

た。それにとどめを刺したのが一九八〇年の DSM-III だったことは言うまでもない。これにたいして、事実上ラカンによって牽引されたフランス精神分析は、米国精神分析のこの凋落のまさに逆を行くかのように、五〇年代から六〇年代にかけて飛躍的な発展を遂げ、七〇年代から八〇年代にかけてフランス文化のなかにすっかり定着してゆく。追って見るように、その原動力のひとつとなったのは、ラカン（とダニエル・ラガーシュ）のもとで第二次世界大戦後に進められた精神分析の脱医学化だった。

一方、フロイトと「哲学」の関係はいかなるものだったのだろうか。フロイトは哲学にたいしてつねに距離を置き、自らの理論を構築する上で哲学を参照することにはっきりと消極的だった。そこには、とりわけショーペンハウアーとニーチェを前にしてのように、自らの思考がこれらの哲学者に影響されてしまうのではないかという強い警戒心もあったが、それ以上に、主に二つの、フロイト自身によってたびたび強調される理由があった。一方はいわばパーソナルな理由だ。初期の弟子のひとりヘルバート・ジルベラーが、フロイトの夢学説に補足した概念である「機能的現象」（睡眠と覚醒のはざまの状態において、眠っている本人が睡魔と闘っている様子が視覚像に変換されること）は、フロイトによれば、自己観察の機能をもつ「自我理想」が夢形成に関与した場合に生じる。このメカニズムについて、フロイトは次のように述べている――

この関与はいつも見いだされるとはかぎらない。私がこの関与を見逃してしまったのは、どうやらそれが私自身の夢においてはたいした役を演じていないからである。哲学的な才に恵まれ、内省する習慣のついている人たちにおいては、この関与がきわめて顕著になってもおかしくない。<sup>3</sup>

自我理想は自己批判と自己観察の二重の機能をもち、後者の機能が病的に現れるとパラノイアの注察妄想になるが、それが内省として生かされれば哲学的思考をもたらす。それが自分には欠けている、とフロイトはいわば自己診断しているのである。

フロイトが哲学と距離をとるもう一方の理由、学問的、イデオロギー的と呼んでもよいそれは、「世界観」の拒絶、より正確には、科学的でない世界観の拒

絶である。きわめて図式的にいえば、フロイトは二種類の「世界観」を区別する。一方は、一般的な意味での世界観、すなわち「われわれの現存在の一切の問題を、上位におかれたひとつの仮説から統一的に解決する知的構築物であり、そのなかには、したがって、未解決の問いはひとつも残っていない」<sup>4</sup>と定義される世界観。この「統一的な世界観」の源泉（啓示や直観）は、宗教において顕著のように、ひとつの「錯覚」（＝ある種の願望充足）にほかならない。これにたいして、もう一方の世界観、すなわち「科学的世界観」は、綿密に調べられた諸観察の知的加工である「研究（Forschung）」のみを源泉とするものであり、そこにはいかなる啓示や直観も入り込む余地がない。この区別にもとづいて、フロイトはこう述べる――

ひとつの特殊科学 [Spezialwissenschaft]、心理学の一部門――すなわち深層心理学もしくは無意識の心理学――として、精神分析は独自の世界観を築くのにもまったく不適格であり、科学の世界観を受け入れなければならない。<sup>5</sup>

一方、哲学にたいするフロイトの評価は手厳しい。曰く――

哲学は科学と対立するものではない。哲学はひとつの科学のふりをし、一部は科学と同じ方法を用いて仕事をするが、しかし遺漏のない首尾一貫した世界像を提供することができるという錯覚に固執することによって、科学から遠ざかる。こうした世界像は、われわれの知識が新しい進歩を遂げるにつれて、なにしろ崩壊せざるをえないのだから。哲学は、われわれの論理操作のもつ認識価値を過大評価し、さらに、たとえば直観というような他の知識源泉を承認することにおいて、方法的に誤りを犯している。<sup>6</sup>

これらの主張のうちに色濃く滲むのは、一九世紀的な実証科学の理想へのフロイトの厚い信頼と忠誠である。フロイトにとって、精神分析は何よりもひとつの「科学」でなければならなかった。精神分析にはいまだ実証されていない多くの仮説があり、学問的な厳密さにかけては物理学や生物学に並ぶべくもない。

にもかかわらず、精神分析はこれらの学問と同等の「科学的」身分を手に入れることを目標とすべきであり、そのための努力を怠るならば、精神分析はたちまち救いようのない独断に陥ってしまうだろう。だからこそ、科学のふりをしつつ、実際には「統一的な世界観」のほうに自らを回収させて憚らない（とフロイトには見えている）哲学は、精神分析のパートナーたりえないのである……。ラカンは、フロイトのこのような科学主義を共有してはいない。だが、そのラカンにおいても、精神分析は科学とのあいだに少なくともひとつの重要な共通項をもつ。「主体」である。それはいかなる意味においてだろうか。そして、この共通項をめぐって、精神分析と哲学はいかなる関係に措かれるのだろうか。この問いには、あとから立ち戻ることにする。

## II 「ラカン派」前史——フランス精神分析の二つの分裂

ラカンが精神分析に与えた理論や制度的装置は、いわゆる「ラカン派」の創出に至る歴史的ドラマと切り離すことができない。

ドイツ語圏や英語圏の国々に比べて、精神分析の導入が一世代分遅れたフランスでは、その本格的な制度的取り組みの開始は、「パリ精神分析協会（Société Psychanalytique de Paris = SPP）」が結成される一九二六年まで待たねばならなかった。二六年といえば、フロイトが『素人分析の問題』を出版した年だ。先に述べたとおり、この出版に前後して、IPA の内部では「非医師分析家」の問題がクローズアップされ、米国は精神分析の医学化に突き進んでいった。「非医師分析家」をめぐるこの国際的論争の渦中にスタートしたフランス精神分析が、まさにこの問題を軸にした組織内の葛藤の末、一九五三年、最初の分裂 (Scission) に至ったことは、もちろん偶然ではない。第二次大戦後、SPP を主導した三人の巨頭、サッシャ・ナシュト、ダニエル・ラガーシュ、およびジャック・ラカンのあいだには——三者とも精神科医であり、加えて、三者とも同一の分析家、ルドルフ・ルヴェンシュタインのもとで教育分析を受けたという共通点にもかかわらず——、「非医師分析家」問題にかんする明白な立場の隔たりがあった。ナシュトは米国流の精神分析の医学化を推進しようとした。これにたいして、ラガーシュは精神分析の門戸を非医師らに解放し、とりわけ心理学をつうじて

精神分析を社会に浸透させることを望んでいた（ラガーシュは四七年にソルボンヌ大学に新設された心理学講座の教授だった）。心理学を既存の準拠枠の体系への心的現象の還元とみなすラカンは<sup>7</sup>、ラガーシュと距離をとりつつも、精神分析を医師の専有物にすることを目論むナシュトとは明確に一線を画していた。この不一致は、一九五一年、新設予定のインスティテュート（分析家訓練施設）をめぐるナシュト陣営とラガーシュ陣営の主導権争いとして一気に噴出し、一連の政治的駆け引きの結果、五三年、ラガーシュ陣営が SPP を離脱する事態に及ぶ。時の SPP 会長として、両陣営の仲裁に尽力したラカンも、最終的には SPP からの離脱を余儀なくされ、ラガーシュらが結成した新組織「フランス精神分析協会 (Société française de psychanalyse = SFP)」にただちに合流した。

これは、もちろん、ラカンの望んだ結果ではなかった。だが、若い世代は新組織を歓迎し、ラカンを支持した（SPP に登録していた「生徒」たちのうち、じつに三分の二以上が SFP に参加した）<sup>8</sup>。とはいえ、その代償は大きかった。SPP からの離脱は、IPA との訣別を意味した（ここには、SPP の事務局金庫に保管されていた同協会規約が、ラガーシュやラカンらの知らぬ間に書き換えられていたらしいという、何ともキナ臭い一件が絡んでいるのだが、詳細には触れない）。ラガーシュは IPA に SPP 分裂の経緯を説明し、IPA への復帰を求めたが、認められなかった。その最大の障碍となったのが、ラカンのいわゆる「短時間セッション」だ。精神分析家を志す人に一定期間の「教育分析」を例外なく義務づける原則が確立された一九二五年以来、IPA は教育分析の国際的規格化を推進し、一九五〇年代には、一回一時間弱の面接を週五回受けることを教育分析の標準と定めていた。これにたいし、一回の面接を一五分から三〇分で切り上げることで、常時二〇人前後の候補生に教育分析を提供していたラカンの実践は、この基準に照らして問題視された。ラカンによれば、「現在の技法が純粋に時計時間的な、それゆえディスクールを貫く糸に関係のない、休止点にしてしまっているところのセッションの停止が、ひとつの区切りの役目を演じる」<sup>9</sup>ことを可能にするこの技法は、分析家に向けて主体が話すことばの「論理」を時計時間に縛られずに浮き立たせるために必然的かつ有効な手段だった。だが、敵対する勢力から見れば、これは集客力を高めるためのあからさまなルール違反にほかならなかった（ナシュト陣営がこの「逸脱」を反 SFP プロパガン

ダに最大限に利用したことは言うまでもない)。

こうして、ラカン独自の技法という最大の火種を抱えたまま出帆した新生 SFP は、その後十年間にわたって驚くべき生産性を発揮し、フランス精神分析の「黄金時代」と呼びうる一時代を築いた。だが「第二の分裂、一九六三年のそれは、はじめからそこにあった。[...] ラガーシュ派とラカン派の分裂はすぐに目に見えるものになった」<sup>10</sup>。一九五九年に SFP が IPA への加盟を再申請したのちも、ラカンは、IPA からの再三の要求にもかかわらず、その独自の技法を改めなかった。その結果、六三年八月、IPA は、SFP の加盟を承認する条件として、ラカンの教育分析家資格の剥奪を要求し、同年十一月、SFP はその要求を受諾することを決定する。ラカン自身が「破門」と呼ぶことになる一幕だ。もとよりラガーシュ派にはラカンを擁護する理由がなかった上に、ラカンの最も優秀な「生徒」だったジャン・ラブランシュ、ディディエ・アンズィユ、ダニエル・ヴィドルシェールらがラカンに見切りをつけたことで、ラカンの命運は尽きたのだった。もっとも、「破門」の宣告を受けた当初、ラカンは SFP の分裂を望まず、ラカン一門の SFP 離脱を企てるジャン・クラヴルールらのグループを牽制してさえいた。だが、SFP の公式プログラムとしてサンタンヌ病院で続けてきた名高い「セミネール」を、「破門」後ただちに中断したのち、六四年一月、ルイ・アルチュセールとクロード・レヴィ＝シュトローズによってお膳立てされたまったく別の制度的枠組のなかで再開するに及んで、ラカンが新たな一步を踏み出したことは、誰の目にも明らかだった。フランスきってのエリート知識人を養成するパリ高等師範学校に場を移したこのセミネールに、ラカンは同校の生徒の団をはじめとする新たな聴衆を獲得し、これらの人々を前に「精神分析の四根本概念」について半年間熱く語り続けた。ラカンがとうとう新学派の設立を宣言したのは、この六四年のセミネールの最終回を三日後に控えた六月二一日だった。その文言はあまりにも有名だ。曰く――

私は――精神分析の大義 [cause psychanalytique] との関係においてこれまでつねにそうであったように、独りで――フランス精神分析学派 [École française de psychanalyse] を設立する。<sup>11</sup>

この学派の名は、数か月後に、フランス語で同じ略号になる「パリ・フロイト派 (École freudienne de Paris = EFP)」へと改められる。だが、この設立宣言に記された日付こそが、フランス精神分析第二の分裂の日付であり、同時に、「ラカン派」なる精神分析家組織が名実ともに誕生した日付であることに変わりはない。ここに至ってはじめて、ラカンは自らの教えに依拠するひとつの組織の——並ぶものなき——頂点に立ったのである。

### III 純粹精神分析と応用精神分析

今日のラカン派ではお馴染みの「純粹精神分析」と「応用精神分析」の明確な区別が導入されたのは、まさにこの「設立宣言」においてである。新学派にラカンが与える構造は三つの部門から成るが、その最初の二つがそれぞれ純粹精神分析と応用精神分析に対応する。まず、三部門の見取図を概観しよう——

1、「純粹精神分析 [psychanalyse pure] セクション」 十全な意味での精神分析の実践および学説。十全な意味での精神分析とは教育分析であり、それ以外の何ものでもない。下位部門—— ①純粹精神分析の学説、②育成としてのその実践の内的批判、③訓練中の精神分析家たちのスーパーヴィジョン。

2、「応用精神分析 [psychanalyse appliquée] セクション」 治療術と医学的臨床を指す。精神分析経験の結果のうちに示される諸々の指標の批判を行うことや、精神分析が導入した諸々のカテゴリーや構造を吟味することによって、臨床検査、疾病学的定義、さらには治療計画の措定において、医学的なグループが精神分析経験に寄与をもたらすことが望まれる。下位部門—— ①治療とそのヴァリエーションについての学説、②決疑論、③精神医学的情報と医学的調査。

3、「フロイト的領野 [Champ freudien] 調査セクション」 精神分析の分野における出版物の批判的検討、精神分析に科学としての身分を与える原則の確立、及び精神分析と他の諸科学のあいだの相互参照関係の構築にかかわる。下位部門—— ①精神分析運動の絶え間ない評釈、②隣接科学との連携、③精神分析の倫理。<sup>12</sup>

これら三本の柱から成る学派の基本構造は、今日のラカン派組織の一部においても踏襲されている、あるいは、少なくとも意識されている。私たちにとつ

て重要なのは、いうまでもなく、最初の二つの部門であり、ここでは両者の関係のみに注目しよう。表面的にみれば、「純粹精神分析」と「応用精神分析」の区別は、事実上、IPA の諸組織に從來から存在していた「教育分析」と「治療のための精神分析」の違いに対応しているといえる。だが、教育分析を精神分析の純粹形態とみなし、それを治療のための分析よりも明確に——テクスチュアルには第一、第二という序数詞によって伴意されただけであるとはいえ——上位に位置づけたことは、じつに革新的な意味をもつ。分析家になることを志す人は「分析によって主張されていることがらを我が身で実際に体験してはじめて納得するに至り、後に分析家としてその納得の力添えを得ることが出来る」<sup>13</sup> というフロイトのテーゼを、たんに追認するのではなく（そこまでなら、IPA がすでに一九二〇年代に実現した育成制度と変わらない）、自らを「破門」した IPA ですら思い及ばない地点にまでそのロジックを展開した結果、ラカンが辿り着いたのがこの「純粹精神分析」という発想だった。それは、別の場所ではこう説明されている——

教育分析をむしろ、それによって精神分析の本性が照らし出されるかもしれぬ完璧な形式として考えるべきではないだろうか […]。これは、われわれ以前には誰も思いつかなかった逆転である。<sup>14</sup>

さて、この「逆転」の関数のひとつが、「応用精神分析」なるタームの再定義である。第一部門の見取図にかかわる説明の最後に、ラカンはこう添えるのを忘れなかった——

最後に次のような学説原理を立てておこう。この部門は […] 人材の募集を医師の資格をもつ者に限定することはない。純粹精神分析は、それ自体としては、治療技法 [technique thérapeutique] ではないのだから。<sup>15</sup>

先に見たとように、ラカンはすでに五三年の分裂の前から、精神分析の医学化（精神分析における医師の特権カースト化）に反対していた。「精神衛生の欲求と手を組んだ心理療法」<sup>16</sup> になり果てたアングロ＝サクソン圏主導の精神分析

への強い不信が、ラカンのうちには一貫して存在している。だが、いま引用した箇所では問われているのは、そのような立場にたった上でなお、やはり互いに無関係ではありえない精神分析と医学の関係、とりわけ医学の「治療（術）的（thérapeutique）」側面との関係をいかに定義するのか、にほかならない。いうまでもなく、精神分析的オリエンテーションをもつ医学的治療（術）は精神分析の「応用」である、というのがラカンの答えだ。いいかえれば、治療的な目的で精神分析技法を用いること、たとえば精神科医療で精神分析的視点にもとづいた心理療法を行うことは<sup>17</sup>、ラカンにとって——そして今日のラカン派分析家たちにとっても——精神分析の「応用」であり、あえていうなら不純な精神分析なのである。こうして、六四年の「設立宣言」以後、ラカン派においては「応用精神分析」の意味が著しく変化した。ラカン以前には、一般に、精神分析理論を文学作品や芸術作品の読解に適用することを指していたこの語は、ラカンの影響のもと、ラカンの生前には主に精神医学における、しかし一九八〇年代以降は広く心理臨床、精神保健臨床全般における、精神分析的オリエンテーションにもとづく「治療的実践」（治療を目的とする実践）を意味するようになる。ここから翻って、あらためて「純粹精神分析」に視線を戻すなら、六四年の「設立宣言」に盛り込まれたラカンの精神分析改革の第一の射程は、ずばり次のように言い表すことができる——ラカンは精神分析をおよそ治療的な目的から解放したのである、と。それならば、ラカンにおいて、精神分析に固有の目的＝終わりはいかに定義されるのだろうか。この問いについては、後ほどあらためて立ち帰ろう。

「応用」としての第二部門の位置づけは、しかし、医学や精神医学を精神分析の外部に追いやることを意味するわけではない。ラカンのセミナーがパリ高等師範学校というある種の公共空間（精神分析家やその生徒たち以外の人々にも開かれた場所、という意味で）に移されたことで、EFPにはやがて同校の生徒をはじめとする多くの非医師の若者が流入することになるとはいえ、結成当初のEFPでは会員の七割以上が医師（の資格をもつ分析家）だった。それゆえラカンは、精神分析固有の目的を「治療術」から切り離す一方で、精神分析的知が精神医学的・医学的臨床の場で吟味され、その結果が精神分析にフィードバックされること（それはすなわち、精神医学的・医学的臨床からの精神分

析への寄与を意味する)を望み,そのような機能を果たす仕組みを学派の「第二部門」として構想したのである. 実際,「設立宣言」にて応用精神分析部門に与えられた役割は,そのものとしてみれば,けっして小さくはない. 下位部門に記された「治療(cure)とそのヴァリエーションについての学説」とは,分析的治療において症状が辿る運命の様々なロジックを抽出する作業のことであり,「決疑論(casuistique)」なるいかめしい語は,ここでは,診断学的カテゴリーを個別症例に適用する際に生じる実践的問題を解決するための議論を意味するだろう. そして,何より忘れてはならないのは,ラカン自身の活動のうちに,それひとつで応用精神分析部門を構成するといっても過言ではないような取り組みがプログラムされていたことだ. いわゆる「病者提示(présentation de malade)」の実践である. 一団の観客(精神医学や他の分野の専門家,ジャーナリストたち)が見守るなかで,催眠状態にあるヒステリー患者の症状を思うがままに操り,その病理現象を解剖してみせたシャルコーのサルペトリエール病院での講義にはじまるこのフランス精神医学の伝統を,ラカンはすすんで継承し,生涯にわたって継続した. すなわち,ひと月に二回ほどのペースで,サンタンヌ病院の講堂を舞台に,居並ぶ精神分析家や精神科医たちを前に患者と対話する公開セッションをもち続けたのである. これは,キャビネでの実践(分析家としての最も固有の活動)やセミナーと並ぶ,ラカンの活動の大きな柱であり,れっきとした精神分析の伝達(transmission)の場だった. 提示されるのは主に精神病患者であり,彼らとの対話はもちろん通常の意味での精神分析にはなりえない. にもかかわらず,いや,だからこそ,そこでは精神分析的知がたえず吟味にかけられ,その知にまだ組み入れられていない発見や認識がリアルタイムで経験されることになる. しかも,そこでの観察は,たとえば『精神病』のセミナー(一九五五~五六)でコメントされる有名な症例,すなわち,「私は豚肉店から来たのです」と口走りつつ「雌豚!」という声を幻覚する女性患者の例のように,ラカン自身によってセミナーのなかで取り上げ直されることも少なくなかった. 「設立宣言」に示された三部門の見取図において,ラカンのセミナーが第一部門(の第一下位部門「純粹精神分析の学説」)に属することは疑いを容れない. とすれば,病者提示とセミナーのあいだをこのようにラカン自身のディスクールが(そして同時に,そのどちらにも出席して

いた弟子たちが) 往還することが、そのまま第一部門と第二部門の本来分かちがたい関係象徴すると見ることもできるかもしれない。

しかし、ラカンの応用精神分析的取り組みには、同時に、いま述べたのと反対のベクトル、すなわち、精神分析家として、精神分析の側から同時代の精神医学にたいしてメッセージを発する意図も含まれていたことを、指摘しておくなくてはならない。ラカンの病者提示について、自らも分析家であり精神科医であるフランソワ・ルギルは次のように述べている――

〔病者〕提示というラカンの臨床的実践はまた、「観察精神医学」が決定的に衰退し、それに代わって、精神医学的知の錬成条件の難破と同時代的であり、それと共犯関係にある、ひとつの介入精神医学が隆盛を極める、というコンテクストにも書き込まれる。<sup>18</sup>

ラカンの病者提示を、同時代の、そして現代の精神医学において形骸化した病者提示へのアンチテーゼと見るルギルにとって、探求されているものと、見出され伝達されるものとの交点に本来は位置づけられるべき臨床提示は、反精神医学、制度精神療法、そして何より精神薬理学の影響のもとで、既知の臨床像をたんに例証するだけの場へと墮落し、患者の語りに耳を傾けることで新たな発見や従来の見解の修正がもたらされる観察の場ではなくなってしまった。この「精神医学の腐敗」と呼ぶべき事態にもかかわらず、ラカンがなおも「病者提示」の実践を続けたのは、「臨床において問われている真理への科学的でかけがえのない関係をそこに求め、見出すべきであると考えていたからではないだろうか」<sup>19</sup> ―と、ルギルは問うている。自らの弟子のなかに反精神医学や制度精神療法の立役者、共鳴者がいた生前のラカンは、ルギルと同じ辛辣さでこれらの潮流を批判することはなかった。だが、少なくとも、科学テクノロジーの進歩と歩調を合わせ、ますます生物学化、薬理学化してゆく同時代の精神医学の変化を、ラカンが苦々しく見ていたことはたしかだ。一九六六年二月、「医学コレージュ」に集まった医師たちを前に、「医学における精神分析の座」という「これまで私の教えのなかで一度も論じたことがない主題」<sup>20</sup> について発言したラカンは、とりわけ二つの点で同時代の医学の困難を指摘している(以下、

私たちはラカンと共に「精神医学」ではなく「医学」について語るが、ここで辿られる文脈においては「医学>精神医学」の包含関係が成り立つものと、すなわち、医学についてのラカンの言葉はそのまま精神医学にも当てはまると、考えて差し支えないだろう)。まず、科学テクノロジーが生産する夥しい化学的もしくは生物学的な「新たな治療エージェント」(=薬品)の「普及係」となることを強いられて、医師が患者の「求め(demande)」に耳を傾けることができないこと。精神分析家は、この求めから患者の欲望(désir)を取り出すことを、その最も基本的な使命のひとつとするが、今日の医師たちは、本来は医師にこそ要求されるはずのこの務めを忘れることを余儀なくされているように見える。他方——これが二つめの困難だ——、科学の進歩によって医学にもたらされる「認識-身体論的(épistémo-somatique)」知から、身体の「享楽(jouissance)」の次元が排除されていること。主体が語るいかなることばもこの享楽によって方向づけられ、主体の症状に含まれうるいかなる可能な利得も同じ享楽に発する以上、それを考慮に入れずしていかなる「倫理」も構築されえない。にもかかわらず、現代の医学ではこの享楽の次元がすっかり看過されている……。これらの見立てを説明したのち、ラカンは自らの発言をこう締め括る——

医師というものが何ものかであり続けなければならないとすれば、ただし、その古代の役割、聖なる役割の遺産ではないような何ものかであり続けなければならないとすれば、私にとってそれは、フロイトの発見を自分自身の人生において推し進め、維持することによって果たされる。私はつねに医師の宣教師をもって任じてきた。医師の役割は神父のそれと同じく、それらの役割のために使われる時間に限定されないのである。<sup>21</sup>

白衣を着ているあいだだけが、医師が医師である時間ではない。医師であることは、文字どおり全人格的な取り組みである。そしてそのような取り組みは、今日、精神分析家にならなければ果たすことができない。ラカンはそう告げている。その真意を読みとることは、けっしてむずかしくない。ニコル・ボシャンが指摘するとおり、「どうやらラカンは、現代社会のなかで医師の座が変化してしまったという事実確認から出発して、精神分析を考えたようだ。精神分析

は、だから、医師が放棄してしまった機能を担うべく呼びかけられるのである」<sup>22</sup>。この意味において、精神分析は医学のパートナーであり、またそうでなくてはならない。ラカンが構想した学派の第二部門、すなわち「応用精神分析」部門ほど、このパートナーシップを結び直すのにふさわしい場が他にあるだろうか。

#### IV 反哲学の根源——科学，哲学，精神分析

「反哲学 (antiphilosophie)」なる語をラカンが用いたのは、一九七五年、ヴァンセンヌ大学センター（現パリ第八大学の前身）精神分析学科の組織改編に当たり（この一件は EFP に激震を走らせるのだが、それについてはここでは立ち入らない）、同時期に創刊された EFP 機関誌『オルニカール？』に寄せた一文、「きっとヴァンセンヌには……」においてである。そこには、精神分析家が依拠しようと同時に、精神分析によって刷新される機会に恵まれうる四つのディシプリンの名が挙げられている。その四つとは、言語学、論理学、トポロジー、および反哲学である。最後に名を連ねる「反哲学」について、ラカンはこう記している——

このことば [= 「反哲学」] で私は、大学のディスクールが、その「教育的」な想定に負っているものについての探求の題目としたい。[…]

大学の語らいを特徴づける痴愚を辛抱強く蒐集すれば、望むらくは、この痴愚をその不壊の根源において、その永遠の夢において、際立たせることができるだろう。

この夢からの目覚めは個別のものでしかない。<sup>23</sup>

この晦渋な一節を理解するには、「六八年五月」への熱烈な共感と、それに続いた失望とが、ラカンを「大学」の批判に向かわせた経緯を踏まえなくてはならない。「五月」の動乱を受けて、翌年に教育大臣エドガー・フォールのもとで進められた高等教育改革は、ラカンにとって、知を制度に囲い込むと同時に、市場への奉仕にも供するための政治的イニシアティブでしかなかった。日

く——

医学においてと同様、他の分野においても、知がもたらす収益を確保することが、大学の使命の最小限の定義である。この定義が伴意するのは育成の先買いであり、そこにおいて育成は、ひとつの市場が知につける価値にたいする知の効果に成り下がる<sup>24</sup>。

この洞察が、他の三つのディスクールとともに六九年に概念化される「大学のディスクール」に繋がってゆく。ここでは示さないが、このディスクールのマテーム（数式ふうの公式）が教えるのは、知（ $S_2$ ）が対象（学びや研究の対象、 $a$ ）に働きかける場所で、学生たる主体（ $\$$ ）が生産されるというプロセスの背後に、真理の座をいわば我有化する主＝教師（ $S_1$ ）が居座っていることだ。大学のディスクールの「痴愚」とは、自らを超越的存在とみなすこの主＝教師が、他のいかなる言語にたいしてもメタ言語となりうるが、それ自身はいかなるメタ言語の対象にもならないような言語を自らが握っていると想定するところにある。そのような言語を話す主体は、言表内容と言表行為が完全に一致した主体、その意味で自己完結した〈我〉でなくてはならない。ラカンによれば、哲学者が指定する「超越論的自我」の正体は、あたかも「一者」であるかのように振る舞うこの〈我〉にほかならない。同時に、このように自己完結した〈我〉が知を牛耳るという夢、ラカンが「〈我〉-支配（Je-cratie）」<sup>25</sup>と呼ぶ夢こそが、大学の語らいの「不壊の根源」にある。「反哲学」とは、こうした〈我〉-支配の打破をめざす取り組みであり、いかなる主体も「分裂した主体」であることをまさに身をもって知る精神分析家以上に、この務めを果たすにふさわしい存在はほかにない。

以上のような読みは、七五年の「きつとヴァンセンヌには……」から、六九年から七〇年にかけてのセミナー『精神分析の裏』に遡行することで拓かれるだろう。だが、ここでは、それとはいくぶん異なる道を辿ってみよう。「反哲学」なるタームに結実するラカンの哲学批判が一貫した形を取りはじめるのは、私の考えでは、一九六四年から六五年にかけてだ。「破門」後の再出発を機に、ラカンが真っ先に手がけたのは「主体」の概念を基礎づけ直す作業だが、その

一環をなしたのが、主体の構造からみた精神分析と科学および哲学の関係を問い直す試みだった。ところで、その時期に書かれたものの、出版されずに終わったテキストのひとつに、六六年に上梓される『エクリ』の序文の草稿がある。この時期のラカンは、IPA から破門された自らの学説の事実上のマニフェストとなる『エクリ』の出版に向けて、その準備にも余念がなかった。ラカンの草稿やノートの類には所在の分からないものが多いが、この草稿にかんしては、幸運にも、六四年から六五年にかけてのセミナー『精神分析にとっての枢要問題』の終盤の回で、その一部をラカンが読み上げたため、ジャック＝アラン・ミレールの編集による公式版こそ未だ目の見ないにせよ、同セミナーの記録のうちに痕跡を留めている。実際に発表された序文とは内容上も、文体の面でも著しく異質なこの草稿では、奇しくも、本稿のテーマにうってつけと言いたくなるような形で、ラカンから見た医学と哲学のある種の関係（あるいは無関係）さえ垣間見られる。というのも、そこでは、ラカンは自らが当初『エクリ』の主要な読者に想定していた医師たちに向けて語っているからだ。曰く――

この著作 [= 『エクリ』] は言うまでもなく医師に、それも、この著作を裏打ちするひとつの対話のパートナー、真の精神分析家を待望する公衆のなかの証人としての医師に向けられている。<sup>26</sup>

この「医師」にラカンが訴えるのは、何よりも、精神分析が近代科学のなかで占める特異な位置についてだ。近代医学はさまざまな科学によって「自らの手続きを支え」、「それらの科学の成果に依拠することで、そのひとつひとつに自らの原則のお墨付きを与える」が、「[科学とのこのような関係]は精神分析的方法にとってまったく不可能である」。かくのごとく、精神分析コミュニティはある種の「島」の状態、すなわち「科学的隔離状態」に置かれている。その理由は、精神分析が主体の「真理」にかかわり、その真理を手段として用いることにかけていっさい妥協しないからだ。そしてここからが、本稿の議論にも直結する重要な箇所である――

精神分析という試練に身を投じる人は誰でも、精神分析が当人に固有の真理のゆえに意味をもつと考えることを躊躇しないだろう。だが、主体のこの真理と、科学の構築物がこの名〔＝科学〕のもとに認識することをわれわれに教えてきたものとの関係を、いかに確立すればよいのだろうか？ここで、われわれの同僚たるパートナー〔＝医師〕を、最良の場合には彼の第二の専攻が、フランス人であるがゆえに、哲学の名のもとで彼に辿らせた期待はずれの大旅行や、それどころか、彼がそこから身につけることができた、すでに埃をかぶったエピステモロジーへと、送り返さないようにしましょう。というのは、ただ単純に、フロイトがわれわれの経験のうちに無意識の名で導入したのは、このように指定された問い〔真理と科学の関係についての問い〕に目を開いてくれる諸事実の次元であり、その実験的筋だったからだ。<sup>27</sup>

バカロレアの科目にまだ「哲学」が残るフランスでは、伝統的に、医学の学位を取得した人が次に哲学を学んだり、反対に、哲学を修めた人が続いて医学を専攻したりするケースが少なくない。にもかかわらず、精神分析の主体に固有の「真理」と「科学」の関係をいかに確立すべきか、と問われた医師が、哲学に答えを求めようとしても無駄である、それよりはむしろフロイトが教えた道を迎えよ——と、ラカンが歯に衣着せず告げている。それでは、哲学にはなぜこの問いに答える資格がないのだろうか。ラカンがこの序文を読み上げるに至ったセミナーの文脈をふりかえってみよう。そこに見出されるのは、まさに、デカルトにおいて知と真理の歴史的分断が生じた、とする見解だ。この考えは、じつは、その前年のセミナー『精神分析の四根本概念』のうちにすでに萌芽していた。煩瑣な議論を避けるため、本文を少し端折ったかたちで引用することをお許し願いたい——

デカルトにとって、最初の Cogito においては […] 真はあまりにも埒外にあるので、デカルトは次に、あるものを確保しなくてはならない。いったい何を確保するのだろうか、欺かない〈他者〉[l'Autre]、しかも、真理の礎をその存在ひとつによって保証することができる〈他者〉でないとした

ら？ […] このように真理を〈他者〉の手に、つまり、ここでは完全なる神の手に、委ねることに伴う驚くべき帰結を、私はざっくりと示すことしかできない。真理はこの神しだいである、というのも、神が何を告げたとしても、それはつねに真理であるだろうから——仮に二たす二は五であると神が告げていたとしても、それは真であつただろう。<sup>28</sup>

『方法序説』におけると同様、『形而上学的省察』においても、考える主体が懐疑から真理へと辿る道のりはいわば二重の導線をもつ。コギトがもたらす明証性は、その明証性にもとづく一連の議論により神の存在およびその無謬性が証明され、それがこの明証性そのものの真理を保証してはじめて、数学的推論から感覚的所与に至るあらゆる知識の確実性を担保することができるからだ。このデカルト的歩みは、ラカンによって二つの角度から論じられる。一方で、「コギト」そのものは、六五年から六六年にかけてのセミナー『精神分析の対象』の冒頭に述べられるとおり、「科学の本質的相關物と私がみなす主体の一契機、すなわち、それが経験において厳密に反復可能であるか否かを知ることがおそらく必要になる、歴史的に限定される一契機」<sup>29</sup>とみなされる。この意味で、コギトこそが「科学の主体」である。ただし、このコギトは、デカルトが考えたようにひとつの「知」（の担い手）であるというより、「たんなる消失点〔un simple point d'évanouissement〕」<sup>30</sup>、いいかえれば、ひとつのシニフィアン（たとえば *Cogito* というシニフィアン）に同一化することで一個の主体が誕生するのと引き替えに、この主体の「存在」が——いかにしてもシニフィアンに同化しえないがゆえに——シニフィアンの領域から締め出される、したがって消失する、そうした点を構成する。私たちがここに捉えねばならないのは、コギトという主体、すなわち「科学の主体」は、分裂した主体であるということだ。この分裂、シニフィアンと欠如（存在の消失による欠如）のあいだの分裂を、私たちは知と真理の分裂と言い換えることができる。なぜなら、知は、主体が同一化するシニフィアンの背後に、そのシニフィアンが繋がりを他のシニフィアンたちの総体として浮かび上がる地平に書き込まれるのにたいし、真理は消失の側に、すなわち、シニフィアンへの同一化と引き替えに主体が失う存在の側に、位置づけられざるをえないからだ。そして、そのかぎりにおいて、「精

精神分析においてわれわれが働きかける主体は、科学の主体でしかありえない<sup>31</sup>。精神分析の主体は、まさに知と真理のあいだで縦割りにされた主体なのである。

これにたいして、デカルト的歩みにたいするラカンのもう一方の評価は、デカルトが「真理を〈他者〉の手に委ね」たことの帰結にかかわる。ラカンが「いかにも独特なやりかた」と評してもいるこの第二の契機において、結局のところ何が問題になっているのだろうか。ラカンの考えはこうだ――

[...] デカルトの歩みの結果は、私が知の蓄積と性格づけた何ものかを可能にすることだった。科学の知の基礎、目的、印、文体は、蓄積されうる知であることであり、哲学はそれ以来 [デカルトの歩み以来]、蓄積されるものとしてのこの知を前にしての、主体の可能性の諸条件を定義すること以外の何ものでもなくなった。ところが、まさにこれこそが哲学の誤ったポジション [fausse position] なのであり、資本の蓄積によって支配される社会における主体の可能性の諸条件をわれわれに提供する役を心理学者に負わせるのと同じ従僕的ポジションに、哲学者を措くのである。[...] まさにデカルトをもって、永遠真理を彼が神の意 [l'arbitraire divin] に丸投げしたという意味において、知の疎外と私が呼ぶであろうことがらがついに遂げられるのである [...]。<sup>32</sup>

デカルトが神なる〈他者〉の意志に永遠真理の保証を委ねたことで、知は真理との関係から決定的に疎外され、こういってよければ真理の軛から解放された。その結果、科学は真理を度外視して知を蓄積することに専念できるようになり、ラカンがやがて真理の「排除 (Verwerfung)」と呼ぶことになるポジション、すなわち「真理のことなど何も知らなくてかまわない」<sup>33</sup> と定式化される科学固有のポジションが生まれた。これにたいして、哲学とはといえば、「知のこうした蓄積を可能にするために自らを構成しなければならない」主体の諸条件を見きわめることを自らの務めとするようになった。ラカンが念頭に置いているのは、「この分野で最も健全な」カントの歩み(とその系譜を引く哲学)である。だが、フランスでは一九二〇年代から職業選択のオリエンテーションに利用されるようになった心理学が、「資本の蓄積によって支配される社会における主体の可能

性の諸条件をわれわれに提供する」従僕になりはてたように、このカント的歩みもまた、結局のところ、哲学を同じ「従僕の立場」に甘んじさせずにはおかない。それは、ラカンからみれば、誤った選択でしかなかった。

このようにラカンによって描かれる精神分析と科学、哲学の立場の違いは明らかだ。真理の問題を神に丸投げしたデカルトのおかげで、真理への問いを排除してひたすら知の蓄積に邁進できるようになった科学と、そのように既成事実化した知の蓄積を前提に、もっぱらそれを可能にする主体性の条件を問い続ける哲学のあいだには、紛れもない共犯関係がある。これにたいして、デカルト的コギトという「分裂した主体」を科学と共有する精神分析は、しかし科学がもはや自らのこの出発点を顧みないのとは反対に、知と真理のあいだの分裂を主体の問いのモーターにし続ける。その点で、精神分析と科学は互いに異質なのだ(だからこそ、ラカンは、精神分析と科学のこの異質さを踏まえた上で、精神分析は科学かという問いを、精神分析を含むような科学とはいかなるものでありうるかという問いによって二重化しなければならなかった<sup>34</sup>)。同時に、先に述べたとおり、ラカンの「反哲学」はここにその根を見出す。核心にあるのは、やはり主体の分裂をめぐる立場の違いにほかならない。ラカンが「従僕的」と呼ぶ哲学の探求はどこに向かうだろうか。いかに逆説的に見えようとも、ほかならぬあの「〈我〉支配」の夢にである。反哲学が批判する自己完結的〈我〉を「超越論的自我」と同一視するとき、ラカンが視界に捉えていたもののひとつが、知の蓄積を可能にする主体的条件を備えたカント的知性であることは疑いを容れない。そこでは、これらの条件を問うことが、真理への問いにではなく、真理を問うことなく真理の座を我有化することに、一気に反転してしまったかのようだ。この立場、真理の座を我有化し、いかなる分裂も知らぬかのように振る舞う自己完結的〈我〉ほど、精神分析の「試練」を自らに課す主体から隔たったものはない。なぜなら、精神分析の主体は真理を問うことを止めないからだ。知と真理の分裂に留まりつつ、主体はこの問いの帰結を我が身に引き受け続けなければならない。それはいかなるプロセスを構成するのだろうか。そのようなプロセスである精神分析とは、いったいどのような実践なのだろうか。

## V 分析の終わりと「パス」

いま私たちの目の前にある問い、すなわち、「分裂した主体」の真理が賭けられる精神分析とはいかなるプロセスであるのか、という問いは、先に純粹精神分析と応用精神分析の区別を論じたさいに私たちが必然的に出会った問い、すなわち、治療的な目的から解放された精神分析（純粹精神分析）にはいかなる固有の「目的＝終わり（fin）」が与えられるのか、という問いと、厳密に一致する。ひとつの精神分析がいかなるプロセスを辿ったかということは、本来的に（とりわけ、フロイト以来、精神分析においてはつねに「事後性（*Nachträglichkeit*）」が本質的な機能を果たすだけになおさら）、その終結からふりかえってはじめて明らかになる。

問題は、この問いに一般的な理論で答えることには限界がある、という点だ。精神分析の終わりがいかなるものでありうるかを最終的に決定できるのは、厳密に個別の事例であり、一般理論によってではないのである。ちなみに、「反哲学」についてラカンが述べた一節の最後に、「大学のディスクール」の根底をなす哲学的〈我〉-支配の夢からの目覚めは「個別のものでしかない」とあるのも、同じ理由による。自らが自己完結した存在であると思いなす夢から、精神分析はたしかに主体を目覚めさせてくれる。だが、それがいかなる目覚めであるのかは、それぞれの主体にしか証言できないのである。

精神分析の目的＝終わりとは何かという問いは、ラカンの教えのなかで疑いもなく最も重要な問いである。とりわけ、「破門」から数年間のあいだ、ラカンはほとんどこの問いに答えることのみに取り組んでいた、といっても過言ではない。ラカンの答えはこうだ――

教育という余計な語をつけて呼ばれる精神分析の結末〔*terminaison*〕、それは、精神分析主体から精神分析家への実際の移行である。<sup>35</sup>

ラカンが教育分析を精神分析の「純粹形態」とみなしたことはすでに述べた。精神分析をいっさいの治療的な目的から解放したことで、教育分析といわゆる「治療のための分析」とを区別する従来の IPA 的伝統は意味をなさなくなる。この

一節は、じつは、そのことのパラフレーズにすぎない。精神分析の純粹形態が教育分析である以上、精神分析とはすなわち「新たな分析家を生み出すプロセス」にほかならない。精神分析の終わりとは、それゆえ、ひとりの分析主体が精神分析家になることであり、逆にいえば、「精神分析家」とはひとつの精神分析の結果である、ということになる。精神分析のこれほど明快な定義がほかにあるだろうか。だが、容易ではないのは、分析主体（のポジション）から分析家（のポジション）へのこの「移行（passage）」の内的なロジックを突き詰めることだ。ここでは、私たちが辿ってきたコンテクストにできるだけ近づけて考えてみよう。真理を〈他者〉の手に委ねるというデカルトの立場がラカンにとって支持しがたいのは、たんにそれが真理への問いを棚上げすることを意味するからではない。そうではなく、真理を求める主体の探究が〈他者〉を経由することは避けられないにせよ、その探究は自ずと〈他者〉そのものを問いに付すこと、そしてその帰結に向き合うことを伴わなければならないからだ。誇張懷疑の渦のなかで「欺く神」の仮説に立ち至ったにもかかわらず、その存在と無謬性を証明された神の手に永遠真理を委ねたあと、もはや二度とこの仮説に立ち帰ることがなかったデカルトには、事実上、精神分析の主体に求められるような仕方で〈他者〉を問いに付す契機が欠けていたと言わねばならない。

ラカンにおいても、じつは、〈他者〉に最初に与えられるのは「真理の保証者」という定義である。言語を用いるすべての「話す主体」が共通して拠って立つべき第三者的領域である〈他者〉（この意味では、〈他者〉は「象徴界」と等しい外延をもつ）は、何よりもパロール（話されたことば）の真理を保証する働きをもつ。〈他者〉（および、とりわけ分析の最初の段階でこの〈他者〉の役を引き受ける分析家）を「真理の主」<sup>36</sup>、あるいは「真理の証人」<sup>37</sup>と呼ぶのはそのためだ。だが、この超越的な〈他者〉が「絶対的主」として主体を圧倒する関係は、精神分析の主体にとって、あくまで出発点であり、デカルトにおけるように到達点ではありえない。というのも、精神分析においては、「真理の保証者」としての〈他者〉の身分が覆される契機が、遅かれ早かれ訪れるからだ。それは、主体のパロールの真理を保証する〈他者〉は、しかし己れ自身の真理を保証することができるのだろうか、という問いが〈他者〉に差し向けられるときにほかならない。この問いにたいするラカンの答えは、「メタ言語は

ない」、すなわち「〈他者〉の〈他者〉はない」<sup>38</sup> というものだ。〈他者〉の真理を請け合うシニフィアンは、シニフィアンであるかぎり〈他者〉に含まれるをえない。これは、いわゆる「ラッセルのパラドクス」と同じ矛盾を引き起こす。だがラカンは、バートランド・ラッセルがこの矛盾の解決のために提案した言語の階層化（いわゆる「論理階型」）をけっして認めない。それは端的に言語の事実と反するからだ。ゆえに、〈他者〉自身の真理を保証するシニフィアンは存在しない。そのようなシニフィアンは、ようするに、〈他者〉には欠けているのである。しかもこのことは、〈他者〉の存在そのものを危うくせずにはおかない。なぜなら、己れの真理の保証を欠く他者は、もはやいかにしても首尾一貫した何かとして存在することはできないからだ。したがって、「〈他者〉は存在しない」<sup>39</sup>。こうして、主体が語ることばの真理を保証してくれるはずの〈他者〉、セッションにおいて精神分析家が文字どおりその化身となることを引き受ける〈他者〉は、己れ自身の真理を保証することができない「存在しない〈他者〉」へと、その権威もろとも失墜する。

精神分析の主体の歩みと、デカルト的コギトの歩みの違いは明らかだ。デカルト的主体が真理を〈他者〉の手に委ね、それによって知の確実性を保証するのは反対に、精神分析の主体は〈他者〉のなかの欠如を前にして、「真理の〈信なし〉[le Sans-Foi de la vérité]」<sup>40</sup> に陥らざるをえない。だが、これが精神分析の主体が手にしうる最終的な答えなのだろうか。もちろん、そうではない。重要なのはむしろここからだ。存在しない以上、〈他者〉は自らの欠陥の責任を負うことはできない。その責任は、いかに逆説的に見えようとも、主体のほうに降りかかる、つまり、主体こそがこの欠如を埋め合わせなければならない羽目に陥るのである。この欠如を前にして、しかし、主体にはもはや差し出すものが何もない——己れが手にしている欠如、すなわち、原初のシニフィアンへの同一化により主体のうちに刻まれたあの根源的な分裂において、主体自身の「存在」の消滅が残した欠如を除いては。というのも、「〈他者〉のなかの欠如」はシニフィアンの領域としての〈他者〉全体を失墜させる（「〈他者〉は存在しない」）以上、主体が何らかのシニフィアンによってこの欠如を埋め合わせる可能性ははじめから排除されているからだ。これは、〈他者〉の去勢を自らの去勢によって埋め合わせるといふ、神経症者にとって何よりも堪えがたい事態を意味

する。すでに一九六二年に、ラカンは次のように述べていた——

神経症者を尻込みさせるのは、去勢そのものではなく、自らの去勢を〈他者〉に欠けているものにする、自らの去勢を何かポジティブなもの、すなわち〈他者〉の機能の保証にすることである。<sup>41</sup>

にもかかわらず、主体は、いまや己れを——〈他者〉の超越性に依らずに——根拠づけるものとしての真理、すなわち「原因として真理」の価値をもつこの欠如を引き受け、このように去勢されていることが露わになった〈他者〉、すなわち消去不能な欠如を刻まれた〈他者〉との関係を結び直すことに向かわねばならない。ラカンによれば、精神分析の主体のこの務めを表すのが、フロイトが『続精神分析入門講義』に記した名高い掟、*Wo Es war, soll Ich werden*（かつてあれ（エス）があったところに、私（自我）が生じなければならない）にほかならない。だが、欠如に欠如を重ねるこの「演算（opération）」（これはラカン自身の言葉だ）には、それだけでは出口がないように見える——もし主体が差し出す欠如の座に、この欠如に代わって（à la place）、何かが入るのでなければ、この「何か」を、ラカンは「対象 *a* (objet *a*)」と呼んだ。対象 *a* とはつまり、〈他者〉における欠如のトポスに、主体の欠如に代わって入り込み、このトポスを、あるいはこれら二つの欠如の重なりを、印づけるような何ものかなのである。主体は、いわばこの対象になることで、欠如をもつ〈他者〉からの分離を、それどころか分離独立を、果たすことができる。といっても、〈他者〉と訣別するわけではない。言語を話す主体である以上、いかなる主体も〈他者〉の領域に身を置くことは避けられない。〈他者〉からの分離独立と私がいうのは、もはや〈他者〉の思いのままにはされないこと、〈他者〉の欲望に振り回されないこと、そして何よりも、我が身を〈他者〉の享樂に差し出さないことだ。そしてそれこそが、分析主体から分析家へのポジションの「移行」をもたらす。少なくとも、この移行を可能にする最小限の条件になる。六七年十月九日の日付をもつラカンの名高いテーゼを、私たちはここで思い起こさねばならない——

精神分析家は己れ自身にのみ拠って立つ。<sup>42</sup>

このテーゼが意味するのは、何よりも、「精神分析家」のタイトルは何らかの〈他者〉、何らかの社会的権威によって保証される資格のようなものではない、ということだ。いま述べた「分離」の過程を経ることで、自らが何ものであるのかを、いや、より正確には、その「何もの」かに自らが行っている同一化の真正さを、もはや〈他者〉に請け合ってもらわなくなった主体のみが、「精神分析家」なるポジションを引き受けることができる。ラカンにとって、繰り返すが、そのような「精神分析家」を生産することが「精神分析」の目的であり、使命なのだ。

ただし、私がここで素描したのは、先に述べた「一般理論」でしかない。ひとりの分析主体が具体的にいかなる軌跡を描いて「精神分析家」のポジションに到達したのかは、厳密に、個別のケースに即して吟味される必要がある。そのためにラカンが考案し、学派内に熾烈な闘争を巻き起こしつつ確立したのが「パス」という制度的装置だった。いや、それは同時に、この吟味を通して、「分析の終わり」をめぐるラカンの理論そのものが確認／反証され、「精神分析とは何か」がそのつど新たに定義し直される現場でもある。六七年十月に提案され、六九年一月に正式に採択された「パス」は、これらの日付が雄弁に物語るように、六八年五月と文字どおり「同時代」の出来事だった。精神分析史上類を見ないこの真に革命的な試みについては、しかし、機会をあらためて論じなくてはならない<sup>43</sup>。

## 註

- <sup>1</sup> Freud, S., Nachwort zur “Frage der Laienanalyse” (1927), in : *Gesammelte Werke*, Bd. XIV, Imago/Fischer, 1948, S. 291.
- <sup>2</sup> *Ibid.*, S. 295.
- <sup>3</sup>フロイト, S. 「ナルシズムの導入にむけて」(1914), 立木康介訳, 『フロイト全集』13 (道旗泰三編), 岩波書店, 2010年, 145頁.
- <sup>4</sup> Freud, S., *Neue Folge der Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse* (1932), *Gesammelte Werke*, Bd. XV, Imago/Fischer, 1940, S. 170 / フロイト, S. 『続精神分析入門』, 高橋義孝訳, 『フロイト著作集』1, 人文書院, 1971年, 515頁 (原文にしたがって, 訳文を一部改めた).

5. *Ibid.*, S. 170-171/同上, 516 頁 (一部改).
6. *Ibid.*, S. 173/同上, 517-518 頁 (一部改).
7. Cf. Lacan, J., Au-delà du «Principe de réalité» (1936), in : *Écrits*, Seuil, 1966, p. 78.
8. Lettre de Jacques Lacan à Rudolph Læwenstein, datée du 14 juillet 1953, in : *La Scission de 1953*, documents édités par J.-A. Miller, Navarin, 1976, p. 121.
9. Lacan, J., Fonction et champ de la parole et du langage en psychanalyse (1953), in : *Écrits*, op. cit., p. 252.
10. Andrée Lehmann, Le tournant (Témoignages sur la SFP et l'EFP), *Ché vuoi ?*, 15, Harmattan, 2001, pp. 59-60.
11. Lacan, J., Acte de fondation (1964), in : *Autres écrits*, Seuil, 2001, p. 229.
12. Cf. *Ibid.*, pp. 230-232.
13. Freud, S., Die Frage der Laienanalyse (1926), in : *Gesammelte Werke*, Bd. XIV, op. cit., S. 226.
14. Lacan, J., Du sujet enfin en question, in : *Écrits*, op. cit., p. 231.
15. Lacan, J., Acte de fondation, *art. cit.*, p. 231.
16. *Ibid.*, p. 237.
17. この想定的重要性は、寝椅子に横になった経験が一度もない精神科医や心理療法家が「精神分析的な心理療法」を「実践」している（それが平然とまかり通っている）日本では、正確に伝わりにくいかもしれない。フランスでは、精神医療においてであろうと、心理療法においてであろうと、精神分析的オリエンテーションにもとづいた治療を行う実践家はほぼ全員、自らが精神分析を受けている（受けた経験がある）。ラカンがここで想定しているのは、そのような実践家（とりわけ医師）による精神分析の「応用」にほかならない。
18. Leguil, F., A propos des présentations cliniques de Jacques Lacan, in : *Connaissez-vous Lacan ?*, Seuil, 1992, p. 116.
19. *Ibid.*, p. 118.
20. Lacan, J., Psychanalyse et médecine (1966), in : *Lettre de l'EFP*, numéro 1, 1967, p. 35.
21. *Ibid.*, p. 51
22. Beauchamp, N., «Sésame, ouvre-toi ! ... je veux sortir», in : *Che vuoi ?*, numéro 15, 2001, p. 29.
23. Lacan, J., Peut-être à Vincennes, in : *Autres écrits*, op. cit., pp. 314-315.
24. Lacan, J., D'une réforme dans son trou (1969), proposé au *Monde* sans jamais être publié.
25. Lacan, J., *Le Séminaire, Livre XVII, L'envers de la psychanalyse* (1969-70), Seuil, 1991, p. 71.
26. Lacan, J., *Le Séminaire, Les problèmes cruciaux pour la psychanalyse*, version établie par P. Valas (<http://staferla.free.fr/>), séance du 9 juin 1965 (p. 257).
27. *Ibid.*
28. Lacan, J., *Le Séminaire, Livre XI, Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse* (1964), Seuil, 1973, p. 37.
29. Lacan, J., La science et la vérité (1965), in : *Écrits*, op. cit., p. 856.
30. Lacan, J., *Les quatre concepts...*, op. cit., p. 204.
31. Lacan, La science et la vérité, *art. cit.*, p. 858.
32. Lacan, J., *Les problèmes cruciaux...*, op. cit., séance du 16 juin 1965 (p. 263).
33. Lacan, J., La science et la vérité, *art. cit.*, p. 874.
34. Cf. Lacan, J., *Les quatre concepts fondamentaux...*, op. cit., la quatrième couverture.
35. Lacan, J., Proposition du 9 octobre 1967 sur le psychanalyste de l'École, in : *Autres écrits*, op. cit., p. 251.
36. Lacan, J., Fonction et champ de la parole et du langage..., *art. cit.*, p. 313.
37. Lacan, J., Subversion du sujet et dialectique du désir dans l'inconscient freudien (1960), in : *Écrits*, op. cit., p. 807.

<sup>38.</sup> *Ibid.*, p. 813.

<sup>39.</sup> *Ibid.*, p. 820.

<sup>40.</sup> *Ibid.*, p. 818.

<sup>41.</sup> Lacan, J., *Le Séminaire, Livre X, L'angoisse* (1962-63), Seuil, Paris, 2004, p. 58.

<sup>42.</sup> Lacan, J., *Proposition du 9 octobre 1967...*, *art. cit.*, p. 243.

<sup>43.</sup> 立木康介「ラカンの68年5月——精神分析の「政治の季節」」, 市田良彦・王寺賢太編, 『現代思想と政治』, 平凡社, 東京, 2016年, 574-609頁.